

ニュースレター

No.39

News Letter

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE

「ヘブライズム研究グループ」について

国際文化学部・文学研究科教授 学院宗教主事 森島 牧人

私は、現在、研究所の中で「ヘブライズムの東漸」に関する研究に携わっています。2000年の歩みの中で、キリスト教は、ヘブライズム伝播の道を東西に分けました。日本人にとってキリスト教とは、欧米を經由して伝播された“西回りのキリスト教”をイメージしますが、東に向い、シルクロードを経て中国まで到達した古代キリスト教があったことも事実です。彼らは、初期の教会形成時に信条の違いから主流派に破門され、イスラム世界におけるキリスト教少数者として緊張関係を保ちつつ、内外からの異端と迫害の歴史を刻みながらも、遙か極東の地まで布教の足を延ばしたのです。

そこで2014年、ヘブライズム研究グループは、西アジアより東アジアに到達したキリスト教ネストリウス派（中国名一景教）にヘブライズム伝播の礎を求め、「ヘブライズム研究プロジェクト」を開始しました。2014年11月には、中国の西安交通大学と合同調査チームを立上げ、古都西安にその調査の足を延ばしました。かつて西安は長安とよばれ、西域の多種多様な民族が行き交い、同時に様々な文物と思想が人々により持ち込まれた首府でありましたが、現在の西安にも、古代キリスト教の一派、景教の石碑、そして回教徒の寺院と信徒たちが残り、一神教が趨勢を誇った唐代の様子を今に伝えています。欧米を經由してアジアに伝播された一神教とは異なる経路を辿ったこの教派が、アジアの険路を持来した信仰とはどのような思想であったのか。また一千年のときを超え、その眠りから目覚めた西安碑林博物館に保管されている「大秦景教流行中國碑」は、私たちに何を語り、何を問うているのか。日・中の大学が、いま、協働で挑んでいる研究調査です。



真言密教にみる国際的宗教空間の存在

ヘブライズム研究プロジェクト調査活動報告

客員研究員 勘田義治

朝鮮半島を経て中国から伝来した外来宗教、仏教が公伝として日本に伝えられたのは六世紀半ばのこと。以来、日本の仏教は宗派ごとの研鑽を深めながら布教の道をのび、十二世紀には有力な六宗派の誕生と、それにとどまらず改革の枠を超えた新仏教の担い手が数多く現れた。

九世紀、唐長安・青龍寺にて恵果に学んだ空海が持ち帰った密教には、一種独特ともいえるべき深秘性、象徴性、儀礼性がみられ、その信仰思想、営為動向には異宗教との対話を可能にする多様性が久しく指摘されてきた。

そこで当研究プロジェクトは今回、「東漸したヘブライズム―景教と真言密教―」というテーマのもと高野山金剛峰寺と奈良大安寺を訪問し、寺院に伝わる造形物や資料類の中に存する外来思想伝播の足跡を辿ることにした。

エリザベス・アンナ・ゴルドンと高野山

キリスト教と仏教の根本同一を旨とする仏基一元論を説いたエリザベス・アンナ・ゴルドン Gordon, Elizabeth Anna は一八五一（嘉永四）年イングリランド・ランカシャーの名家に生まれ、スコットランドの貴族ジョン・エドワード・ゴルドンに嫁した。ヴィクトリア女王の女官を勤めた後、オックスフォード大学で学んだ彼女は仏教に詳しい比較宗教学者フリードリヒ・マックス・ミュラー Müller, Friedrich Max に師事し、留学生高楠順

次郎の知遇を得ることになった。一八九一（明治二四）年夫妻での世界旅行の途中、日本を訪れた彼女は日本文化への造詣と景慕を深め、一九〇七（明治四〇）年に一人で再来し、以来日本を拠点として東洋の宗教の研究に励んだ。その調査活動は多岐にわたり、中国や朝鮮半島へも調査の足を延ばし、持論となる仏基一元論の完成に取り組んだ。また日本には洋書が少ないと嘆く高楠順次郎らの要請を聞き、彼女は日比谷図書館や早稲田大学に多数の書籍と資料を寄贈した。晩年の六年間は京都ホテルに逗留し、一九二五（大正一四）年に同ホテルにて七四歳で客死した。告別式は京都の東寺にて仏式法要として行われ、高野山墓所と朝鮮金剛山長安寺に分骨がなされた。

彼女は仏教がインドから中央アジアを経て中国に伝わる過程で、西欧からの思想と触れ合い、その影響を受けたと確信する一方、唐代の古代キリスト教「景教」に注目し、ザビエルによる布教のはるか以前に空海により古代キリスト教「景教」が日本に伝播され、仏教と習合したと主張した。高野山金剛峰寺と朝鮮の金剛山長安寺には彼女が覆刻して建立した景教碑が残されている。高野山の景教碑については、長安留学の際に空海が景教徒に出遭ったが故に真言密教にその影響が見られ、この事跡をゴルドン夫人が称え建立したとする説が有力であったが、今回の調査ではゴルドン夫人と当時の高野山の関係、特に高僧たちとの深い親交の様子、そしてその結果、密教の灌頂を受け、戒名を授かっていることなどが判明し、石碑の建立は彼女が提唱した仏基一元論と密教思想との高次での融合の表れとも推察できる。



高野山金剛峰寺の景教碑（高野山大学提供）

1911年10月1日、ゴルドン夫人が施主となって開眼供養が執り行われた。供養の導師は座主代寺務検校山階法師が勤め、一の橋の東詰（現在は奥の院に移動）に建立された。仙台石でつくられ、西安の「大秦景教流行中国碑」よりも大きく、裏面には西安の石碑に無い文様や文言が刻まれている。この石碑の隣にはゴルドン夫人の墓がある。

大安寺における外来宗教との出会い

インドで発生し、中国、朝鮮半島を経由した仏教の流入は、儒教や道教などの外来思想の伝播とも連動していた。仏教徒によって行われたこの文化や思想の流れは当時の国家や政治への進出と経済や技術へのインパクトを伴い、仏教は国家建設という巨大プロジェクトを主導する思想的な支柱と成長したのだった。その様は仏教を厚く信仰し興隆につとめた聖徳太子の事蹟にみることができ、平安仏教の展開の根源となった奈良・大安寺は訪れる我々に多くを語りかけてくる。

高野山真言宗の仏教寺院大安寺は奈良市中心部に位置し、南都七大寺のひとつとして、奈良時代から平安時代前半にかけて東大寺、興福寺と並ぶ大寺であった。同寺は聖徳太子が平群郡額田部（現大和郡山南市南部）に仏教修行の道場、学問所として創建した「熊凝精舎」に始まる。百濟大寺、高市大寺、大官大寺と名と所を変え、平城京に移り大安寺となった。左京に広大な寺域を占めた大安寺には七重の塔が二基聳え、千名を超える僧侶たちが修行に励み、国の筆頭寺院として仏教の総合大学の様相を呈していたという。

律令国家建設の過程において、朝廷は仏教を国家の保護統制下におき、国家の安寧隆昌を祈願させることを目的に南都七大寺（官寺）を建設した。その一つとされる大安寺は長安の西明寺の伽藍を模したといわれている。インドの祇園精舎をモデルとし、長安の迎賓館として機能した西明寺は玄奘三蔵を監主とし、空海も学んだことで知られる名刹である。大安寺伽藍の造営を勾当した道慈律師もこの西明寺で修行を積んだという。道慈帰朝後、その学びは善議大徳に受け継がれ、更に善議から勤操大徳にその奥義が授けられた。勤操は弘法大師空海の師として知られ、若き日の空海を伴い和泉の槇尾山に赴いて、出家させた空海剃髪の師である。

一方、当時の大安寺には唐をはじめインド、林邑（ベトナム）などからの渡来僧が多く訪れ、その中には大安寺に居住し、生涯を日本で過ごした国賓級の高僧もあった。中でも東大寺大仏開眼の大導師をつとめたインド僧菩提僊那、呪願師をした唐の道璿、林邑衆を披露した林邑僧の仏哲らは仏教教学の中心を担う名僧として、密教經典の請来、禅や華嚴経、呪術やインド系雅楽の伝播に深く寄与した。

また唐僧の随行者として逗留したペルシャ人李密翳は医師、景教徒（ネストリウス派信徒）とも推察され、「続日本紀」にみえる唯ひとりこのペルシャ人であり、聖武天皇より位階を授かったとある。ペルシャから中央アジア、唐を経て日本へ渡来した彼は大安寺に何を残し、何を持ち帰ったのだろうか。この様に奈良・大安寺は祇園精舎を現実世界に表現した寺として、また平城京における国際センターとしての役割を担った、まさに真言密教にみる国際的宗教空間といえよう。



大安寺本堂

大安寺の歴史については747（天平19）年作成の「大安寺伽藍縁起并流記資財帳（だいはんじがらんえんぎならびにるきしざいちょう）」と正史『日本書紀』『続日本紀』の記述が主なよりどころとなる。本堂や収蔵庫にある木造十一面観音立像、木造馬頭観音立像他は国の重要文化財に指定されている。

関東学院と内村鑑三

関東学院宗教センター室長 鳴坂明人

坂田祐は内村鑑三の「聖書之研究」に接し甚大な感化を受け、内村の門下生であったことを、「わたしの生涯に於いて、わたしにとつて最も重大なことは、わたしが一高在学中に、内村鑑三先生の弟子となったことである。」と自負している。また、坂田祐は中学関東学院の設立に従事する中で内村鑑三から多くの指導を受け、その印象深い助言を次のように述懐している。

大いにやれ、いくらミッシヨンの補助で立つ学校であっても、日本の学校であり、日本人を教育する学校であることを忘れるな。日本には立派な武士道がある。この武士道の土台の上に築きあげられたキリスト教が、建学の精神でなければならぬ。できるだけ早く独立すること、経済上の独立なくして思想の自由も、信仰の自由も得られない。相当の待遇を受けても、決して卑屈にならぬよう・・・ (坂田祐『恩寵の生涯』九七〜九八頁 待晨堂 一九七六年)

一方、内村鑑三は一九一二年三月一日、完成後間もない中学関東学院を訪問したときのことを日記に綴っている。

(中略) 野毛山のつづきに新築されし関東学院の校舎を見た。米国バプテスト教会の経営になるもの、其の規模大にして其の設備の完全なるに驚いた。其の校長は文学士坂田祐君、旧き柏木連の一人ある。その教頭ならびに二三の教師もまた同信の友である。 (内村鑑三『内村鑑三日記書簡全集 第二巻』二六頁 教文館 昭和五一年再販)

アメリカ嫌い、宣教師嫌いで知られる内村鑑三が、アメリカン・バプテスト教会の補助で設立された関東学院のキリスト教教育を高く評価しているのである。内村自身はアメリカから帰国後、北越学館、東洋英和学校、第一高等中学校、泰西学館、熊本英学校を短時間で辞職し、学校と名のつく教育機関では全く称賛できず経歴を残してはいない。内村の日本人としての強烈な意識と日本の精神風土を重視する独自のキリスト教信仰のゆえに、当時の教派的キリスト教学校の宣教師、教員との軋轢は避けられなかったのであろう。

しかし内村の教育者としての本領は、学校よりも聖書研究会を通じて十分に発揮されたということができる。内村は「然り人を作れよ、そは人一人を作るは憲法を作るよりも偉大なり」と人格教育の大切さを主張し、その門下生から次世代を担う人材が数多く排出されている。坂田祐をはじめ、矢内原忠雄、南原繁、塚本虎二等に代表される有能な教育者、聖書研究者である。彼等に共通する点は、当時の軍国主義の趨勢にあつて、日本が軍勢力ではなく、聖書の教えを基盤とする世界平和のリーダーとなること、平和国家の道を歩むべきことを果敢に唱え続けたことである。

内村鑑三の思想の意義は、理想の日本を愛する熱烈な愛国心と日本的キリスト教信仰、真の平和を希求する非戦論を唱え、同時に実験的な取り組みをも重視したことである。その内村の思想を継承した坂田祐は関東学院において校訓「人になれ 奉仕せよ」を掲げて、キリスト教に基づく人格教育を実践し、それは、今後も学院関係者に引き継がれるべき教育理念である。

内村鑑三のキリスト教信仰を基盤とする問題意識は、日本の問題を越え、人類と世界に向けられていたことは大いに学ぶべきことである。内村の墓碑に綴られている名言を肝に銘じておきたい。

I for Japan Japan for the World The World for Christ And All for God

(われは日本のため 日本は世界のため、世界はキリストのため、すべては神のため)



日本の近代化とヘボン

客員研究員・国際文化学部非常勤講師 権田 益美

キリスト教と文化研究所の客員研究員として、活動させていただいております権田益美と申します。2014年度に関東学院大学大学院博士課程を修了いたしました。私の大学院から現在までの研究テーマは、「日本の近代化とヘボン」です。主にヘボンの横浜での医療宣教活動と英語教育について研究してまいりました。現在は、本大学にて非常勤として勤務させていただいております。



「キリスト教と日本の精神風土」の研究会にて、諸先生方の研究発表を拝聴し、それに伴う意見交換に参加させていただく事は、研究方法を学ぶ貴重な機会であり、研究の励みともなっております。また「ヘブライニズム研究プロジェクト」においては、本年度は高野山と奈良大安寺への研修に参加させていただきました。高野山大学では景教研究の貴重な資料を拝見することができ、奈良大安寺では仏教伝来の経緯や景教との接点等を学ぶ機会を得て、有意義な時を過ごした事を感謝いたします。滞在先での諸先生方の積極的な交流から、現地調査の大切さを学びました。今後とも、御指導よろしくお願いたします。

「バプテスト研究」の担い手として

所員・経済学部専任講師・大学宗教主事 内藤 幹子

数年前より客員研究員として参加させて頂いておりました「バプテスト研究」のグループに、2015年度より所員として参加させて頂くようになりました。わたし個人としてはドイツのバプテスト教会やその歴史と思想に関心を寄せて学びを続けていますが、この研究会に参加することにより、バプテストの基礎的な歴史や思想に関する基礎を学ぶ機会が与えられ、また自分では今まで出会うことのできなかつたテーマや詳細な研究の成果に触れさせて頂くことができるようになりました。バプテスト研究の徒として、バプテストの一教会人として、またバプテスト教会に仕える働き人として、常に新たな刺激や気づきを得ることのできるこの環境は何と恵まれたものかと思えます。

同時に日本国内で本格的な「バプテスト研究」のグループに加わる機会がそう簡単には得られない現状を思いますが、関東学院大学がこのような研究グループを持ち続けていくことの意義と責任のようなものを感じないわけにはいきません。諸先輩方から学び、その後ろ姿を追いかけながら、そのような重荷の一端を共に担う存在として成長していくことができるよう祈りつつ。



関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL: 045-786-7873 (研究所直通・月～金9:30～17:00)
FAX: 045-786-7806 (研究所直通・24時間受け付)
E-mail: kgujesus@kanto-gakuin.ac.jp

発行者：村椿 真理

Director: Makoto Muratsubaki